

## 第6回 東アジア・中央アジア分科会分科会 議事録

開催日時：2009年2月20日(金) 15:00～17:00

場 所：東京文化財研究所 管理部会議室

出席者(敬称略)：青木、早乙女、林(分科会委員)、前田(西アジア分科会座長)、濱田(文化庁)、清水、友田、二神(東京文化財研究所)、豊島、小角、土居(コンソーシアム事務局)

### ■ モンゴルの文化遺産保存に関する報告 [東京文化財研究所 主任研究員 二神葉子]

#### 報告の概要

- 2008年11月に行われたモンゴル教育・文化・科学省と国立文化遺産センター職員招聘事業について。先方の国立文化遺産センター拡充計画に基づき、国内の主要な機関13箇所の視察を実施。訪問先の期間からは、留学生受入、共同研究の分野で協力の可能性があるとの発言あり。また、コンソーシアムではこの来日に合わせて研究会を開催し、熱心な議論が行われた。
- 2009年度事業の打ち合わせのため、3月9日～13日にかけて訪モを予定。

- ・東京芸術大学は、具体的にどの講座を視察したのか。
  - 油画修復研究室の木島教授の研究室を訪問した。話を聞いたところ、今年度1名のモンゴル人(家族の日本赴任に帯同して来日中の元国立文化遺産センター職員)が芸大の保存修復学科を受験しているとのこと。また、東京芸術大学以外にも、例えば東北芸工大学でも受入に前向きな発言を頂いた。東京芸術大学、東北芸工大学については、こちらから声をかけた経緯がある。
- ・保存科学だけでなく、他の分野にも声をかけるべきではないか。
  - 今回は、来日の目的などを聞いて、直前に保存科学分野のみ声をかける形となった。国立文化遺産センターは現在絵画や考古遺物の保存を中心に取り組んでいることから、保存科学分野が必要と考えた。例えば建造物に関しては、スードゥール社という別の組織が行っており、モンゴル国内でも組織によって対応している分野が異なるようである。
- ・最近私立大学にも文化遺産に関するコースが新設されていたり、例えば榎原考古学研究所もアジアから多くの若手研究所の受入実績があったりするので、今後はそういうところも訪問先として考えてはどうか。
- ・留学生の受入は、モンゴルに限らず地域共通の課題となっている。コンソーシアムとして、この課題に対する対応を検討すべきだろう。
- ・モンゴル側からは、その後協力要請などはあったのか。
  - 具体的なことは、3月訪モの際に調整する予定。施設の件については、過去の案件などで面識のある業者などと個別に連絡を取り合って情報収集しているようだ。
- ・今回の視察に際して、モンゴル側の感想として「いいところを見過ぎたので予算が足りなさそうだ」というような意見がでていた。
- ・高額な機材を供与しても使いこなせないという問題があるのだから、見学先については相応の組織を選んで行くべきだろう。

→ その点については、先方も「自分たちには何ができるか」「使いこなせるか」「自国で工夫して制作することが可能か」などということを念頭に置きながら視察していたようだ。初期費用だけでなく、文責にかかるランニングコストについても考慮に入れていた。

- ・ICCROM の研修では、高度な機材の使用法というよりは、帰国後国内で実施可能な基礎的な手法に重点を置いて研修を行っている。このような発想で、われわれもモンゴルで何ができるのかを考えてプログラムを組むべきだろう。
- ・インドの例で行くと、古い機材を使って修復を行っているが、ここに ICCROM から多くのスタッフが常駐しながら人材育成に力を入れる事業が行われている。

#### ■ タジキスタン 拠点交流事業 報告 [東京文化財研究所 特別研究員 影山悦子]

##### 報告の概要

- 2008年11月～12月に行われたミッションの報告。タジキスタンでは、壁画の修復にあたる専門家が少なく、1950年代に旧ソビエトのエルミタージュ美術館職員コストロフ氏より伝授されたメソッドを未だに継承している。しかし、この処置方法だと経年劣化により表面が黄ばんだり、黒色になっていることが分かった。
- このようなことを検討するためのワークショップを開催したところ、これまで壁画修復に特化した研修がなかったため、今回のワークショップが非常に役に立ったとのコメントが寄せられた。
- 2009年2月末～3月上旬に4度目のミッションを開催する予定。前回の残作業などを行う。

- ・PBMAの正式名称は何か。これらの処置は、別途強化処理の必要はないのか  
→ ポリブチル・メタクリレート。今回、除去を試みたところ、キシレン等の溶剤を用いて除去することができた。強化処理については、まだその段階まで作業が進んでいない。
- ・ワークショップで推進している保存処理方法は、現地の博物館の従来手法と異なるようだが、それには問題はないのか。  
→ 現在も、エルミタージュ美術館より職員を招聘してPBMAによる保存処置を施している。我々としては、先に述べたような問題が起こるため、PBMA以外の薬品の使用を推進したいが、この件についてはまだ結論に至っていない。
- ・中央アジアは壁画が沢山存在しており、インド、アジャンタ、カッパドキアなど色々なところで我が国による壁画の修復事業が行われようとしている。その点から行くと、壁画修復に関する全体の統一感を議論する必要があるだろう。これは、異なる気候条件下での非常に野心的な試みといえる。十分な議論ができるよう、各プロジェクトは情報公開に努めて欲しい。
- ・今回の事業は、タジキスタンに中央アジア5ヶ国から専門家が集まったことに大きな成果があるといえる。これは、昨年東京文化財研究所文化遺産国際協力センターが中央アジアで開催した会議の成果を持続する結果となっており、非常に望ましい形である。
- ・今回、ロシアからの参加者はいなかったのか。  
→ 招聘を試みたが、多忙のため欠席となった。次回は参加を予定している。
- ・中央アジアでは、壁画の修復事業以外にどのようなプロジェクトがあるのか。

→龍谷大学が発掘調査を行っている。タジキスタンでは、つい先頃までアジナ・テパの修復事業を行っていた。加藤九祚氏は、ウズベキスタンで調査をされている。

- ・中央アジアの壁画といっても、カザフスタンやキルギスタン、トルクメニスタンにはほとんど壁画はないだろう
- ・現在、東京文化財研究所では、エルミタージュ美術館で過去に多く行った壁画の顔料分析にかかる報告書の日本語翻訳作業を進めている。

## ■ 中国 文化庁四川震災復興に係る文化財協力(専門家交流)ワークショップ

「中日文化遺産地震対策検討会」の開催について [東京文化財研究所 主任研究員 友田正彦]

### 報告の概要

- 昨年 5 月に大地震によって被災した四川省の木造建造物の耐震対策に関するワークショップを 2 月に開催した。これは、地震直後に日本政府としてとりまとめた支援パッケージの一環であり、具体的支援の内容を協議するため 9 月に事前調査を行った結果に基づくプログラムである。
- ワークショップでは、日本側は耐震対策の事例紹介を行ったのに対し、中国側は被災状況や不幸復興計画の現状報告が中心であり、現地で補強を含めた修復作業が本格化するのこれからと思われる。今回のワークショップは内容が濃く、まずまずの成功であったが、日本としてこれからどうするかという点について、今後の効率的活効果的な交流・協力の在り方をさらに検討していくことが重要と考える。

- ・効果的なワークショップになったと自負しているが、今回は、日本からかなり大胆な補強事例を中心に紹介した。しかし、中国の建造物の特徴として、日本のように補強材を隠せるような構造が少ないため、なかなか中国には受け入れにくい事例だったかもしれない。もうすこし目立たない、控えめな事例も交えて紹介すべきだったと考えている。
- ・中国では、基礎の安定を重要視している模様だったが、そういう仕事をするための国全体としての方針がなければ、現場判断だけで個別に耐震を行っていくのは難しい、という印象を受けた。
- ・今回は国家文物局の主催ではあったが、重鎮の中座が多かったのが残念だった。
- ・先日、テレビで四川省の民家の復興に関する番組を見る機会があった。その番組を見ていて、まだまだ民間の生活も軌道には乗りきれず、荒れた印象が残っていると感じた。  
→そうした精神的な問題についても、神戸の復興に伴う事例を紹介した。
- ・総じて今回のワークショップは、取り掛かりとしては成功だったといえる。そして、現場は継続的な交流を望んでいるが、今後のことについては、国の方針が欲しいところである。先に述べたように、細かな事例に関する意見交換はやり残した感がある。また、修理の理念やシステムに関する議論についても、体制が整っていないとむしろ大切なものをなくしてしまうという点で意見が一致しているが、そのあたりの議論もまだ途上である。
- ・JICA は、耐震補強に関する構造系専門家の招聘研修プログラムを予定しているとのことだが、歴史的建造物の耐震補強に関しては JICA 側で想定している専門家の手に負えず、東京文化財研究所へ問い合わせが来ている。そこで、まずは一般建造物の研修を JICA 内で実施し、その中で数名を選抜して、第 2 弾として歴

史的建造物の耐震補強の研修を引き続き実施してはどうかと提案している。

- ・今回のワークショップでなにか提言をまとめるべきではないか。  
→それは、やはりこの後にどのような協力/交流があるかということがわからないと難しいだろう。
- ・文化庁としても、今回のワークショップの成果はあったと認識している。おり、今後も長期的に関係を続けていければ、と思うが、考えている。今回の結果を受け、今後どのような協力関係が築けるのか、内容を吟味し、このような場で議論をしながら今後の在り方を考えたい。
- ・今回紹介した博物館の耐震対策は、免震装置の話だけか？  
→展示の免震補強だけでなく、テグスによる固定や、或いは収蔵棚のシンプルな補強方法など、低予算で今すぐにもできるような事例の紹介もあった。

## ■ 1999年台湾大地震被災文化財への協力について [サイバー大学 教授 青木繁夫]

### 報告の概要

- タイトルは台湾地震の報告とあるが、それにとどまらず、我が国の文化遺産被災への対応の経緯と、国際協力への取り組みを概観した報告をしたい。
- 我が国の文化財の最初の被災は関東大震災の時であるが、そのときの教訓が活かされないまま 1995年の阪神大震災を迎えた。
- 文化遺産の自然災害からの危機管理という概念について、世界的に認知されるようになったのはフィレンツェで起こった大洪水による被災で、これが転機となり、国際的に自然災害への危機管理の重要性が認識されるようになった。日本では阪神大震災が転機となり、これを機に飛躍的に耐震対策が充実する。
- 台湾大震災への日本の支援の経緯は少々複雑で、国交を持たない日本政府がどのように協力できるか、関係者が様々な工夫を凝らして支援した経緯がある。結局は、国の組織ではない文化財保存修復学会が受け皿となり、計4回専門家を派遣し、被害調査やワークショップの開催、建造物の修復計画立案や石碑の修復事業を手がけた。余震対策のため、電話対応をしたこともある。
- アチェで起こったスマトラ沖地震による津波災害の場合は、図書や史料研究の関係者が中心となって動き、トヨタ財団の助成や、文化庁の支援により、3回応急処置を行うための緊急ミッションを派遣している。
- 我が国の自然災害による緊急支援の課題としてあげられるのは、①即応能力のある人材の不足、②緊急派遣可能な人材の不足、③現地専門家/組織とのネットワークの存在、④資金、⑤このような事業にあたることのできる人材教育システムの不在 等があげられる。
- これまでの緊急支援は、他分野との連携無しに動いていることが多く、こうした調整こそ、コンソーシアムの中で考えていくべき課題だといえる。

- ・今日紹介いただいた事例は災害への対応ということであるが、発掘に伴った成果への対応についても考えてもらいたい。先日西アジア分科会で提案があったように、日本人研究者が現地で発掘したものの保存も、フォローしなければいけない案件だろう。世界的発見の成果の保存を何とか日本全体で受け止められないか、考えていく必要があるだろう。
- ・今回の四川のワークショップについても、何らかの形で協力を広報すべきではないのか。

→これまで行政は広報活動を怠ってきたと反省している。広報はとても重要であると認識しているので、今後は、コンソーシアムと連携して、こうした成果を広く公開していきたい。

・これまで我が国が行ってきた緊急対応は、ノウハウとして我々の中に定着したとは言い難い。本日の発表では貴重な提案をいただき、積極的な方向性が示されたといえる。

→台湾の事例は、実際の派遣に至るまでに、文化庁と東京文化財研究所が綿密に議論を行っている。今後は、コンソーシアムのような場でしっかりと議論をして進めていくべきだろう。

## ■ その他 [事務局]

### 報告の概要

- 1月18日の一般公開による国際シンポジウムでは、400名近い参加者を迎え、盛大に行うことができた。広報に協力下さった委員各位に御礼申し上げます。
- 来る3月26日の午後13:30より総会を予定しており、引き続き14:00から研究会を企画している。詳細については、今後ご案内を差し上げたい。

以上